禁じられた文字

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
禁じられた文字

【Ｎコード】
Ｎ０２８５Ｚ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
明の太祖は自分の気に入らない文字を文章に使った学者を片っ端から殺していた。彼はそのことを知っていたので最新の注意を払って書いたが。明の太祖はこの他にも大規模な粛清を行ってもいます。

第一章

禁じられた文字

明の太祖を朱元璋という。

まさに食うや食わずやのだ。乞食同然の孤児から身を起こしてだ。皇帝にまでなった。

これはかの漢の高祖劉邦よりも上であった。劉邦は少なくとも満足に食えてはいた。彼の家はそこまで貧しくはなかったのである。

だが彼は親もなくし兄弟とも離れだ。完全に孤立していた。

しかしだ。それでもだ。彼はだ。

皇帝になった。まさに裸一貫からそこまでなったのだ。それを考えるとまさに英傑である。そのことを否定する者は誰もいなかった。

だが彼はだ。異様な男だった。

顔はあばただらけで鼻は丸く目は細く吊り上がりだ。顎が突き出て口は薄く広い。一度見ただけで忘れられない、そうした顔である。

そしてその異相はだ。皇帝になって露骨に出た。

功臣達への相次ぐ粛清を行ったのだ。何万もの者達がその犠牲になった。その為にだ。官吏達は朝廷への出仕の度に何時死んでもいいように覚悟を決めていた。

とにかく次から次にだ。多くの者が粛清されていた。このことについてだ。

学者達は戦々恐々としてだ。こう囁き合っていた。

「皇帝になられるまでは素晴らしかったのだが」

「しかしだ」

「今はおかしいぞ」

「帝は何かが違う」

「確かに皇帝になって変わった英傑はいる」

ここで名前が出たのは。やはり彼だった。

「漢の高祖もそうだったがな」

「うむ、皇帝になってからはその人柄が消えた」
「鷹揚な大器が小心な猜疑心の塊になった」
「功臣達を次々に殺した」
これは史記にある。韓信達がその犠牲になっている。
「そうしたことは常にあるがな」
「しかし今はそれどころじゃない」
「あれだけの血生臭い粛清はないぞ」
「一体どれだけの功臣が死んだ」
「殺されたのだ」
「今の明には仕えたくはない」
「何時殺されるかわからない」
「そうだ、帝は何をされるかわからんぞ」
こう話してだった。そしてだ。
彼等もだ。その中でだった。
皇帝からは距離を置こうと決意した。身の安全の為だ。
それで言葉を慎み何も言わなかった。ただ文を書くだけに徹した。
だが。
その文でだ。ある騒ぎが起こった。
ある高名な学者の文を見てだ。皇帝は言ったのだ。
「この学者を処刑せよ」
「えっ、何故ですか」
「それは」
「不敬である」
僅かに残りそれでも何時粛清されるかわからない大臣達がだ。怯えながら玉座の皇帝に尋ねた。
「それは一体」
「どうしてなのでしょうか」
「この文字である」
皇帝は彼等にその文をだ。見せたのだった。
だが彼等はだ。その文を見てもだ。

首を捻るばかりだった。それでだった。
恐る恐る皇帝に尋ねたのだった。
「あの、この文に不敬がですか」
「あるのですか」
「左様ですか」
「道とある」
確かにだ。文に道という言葉がある。皇帝はその文字を指し示して言うのだった。
「これは盗と同じ音だな」
「は、はい。そうです」
「その通りです」
このことは皇帝の言う通りだった。大臣達も頷けた。
皇帝はさらに続けた。
「朕を盗人と謗っているではないか」
「帝をですか」
「盗人とですか」
「謗っていると」
「そうなのですか」
「そうだ。隠された謗りである」
そうだというのだ。

第二章

「許してはならない。この文を書いた学者を処刑せよ」
「は、はいわかりました」
「それでは」
こうしてであった。この学者は即座に死刑になった。
この学者だけではなかった。次々とだ。
多くの名を知られた学者がだ。粛清されていってだ。それを見てだ。
残った学者達はだ。さらに慎重さを強いられることになった。彼等はだ。
密かに集まりだ。話すのだった。
「何を書けばいいのだ」
「道という言葉なぞ普通に使うではないか」
「そうだ、天の道にしろだ」
「帝を褒め称える言葉だというのに」
「それを書いて死刑だと」
「しかもその死刑がだ」
ただの死刑ではなかった。これがさらに問題だった。
「腰斬のうえに八つ裂きだ」
「秦の始皇帝ですらしなかったぞ」
「うむ、焚書坑儒どころではない」
「元の方がましだ」
その漢人を冷遇し儒者、即ち学者を軽く見ていた蒙古人の王朝よりも酷いというのだ。
「元ですらあそこまで無道ではなかったぞ」
「一体何を書けばいいのだ」
「ただ帝を褒め称えればいいのだろうか」
「それしかないのか」

「そうだな。下手なことを書けば」
まさにだ。それだけで、であった。
「首が飛ぶどころではない」
「我等も八つ裂きになるぞ」
「屍は曝される」
「そんな最期は御免だ」
「身を慎まねば」
こう言い合いだ。彼等は。
文にも極端に慎重になった。とにかくだ。
皇帝を褒め称える無難な文に徹した。そうしていた。
だが、だった。これまたある学者がだ。文を書いたがだ。
皇帝はその文を読みだ。また言ったのだった。
「この文を書いたものを死罪にせよ」
「あの、この者は何をしたのでしょうか」
「何を書いたのでしょうか」
大臣達はまた恐る恐る尋ねた。
「一体」
「何を書いてのことでしょうか」
「光とある」
皇帝はまずはその文字をし敵した。
「光とは僧侶を指すものだ」
「僧侶を？」
「それを」
「朕はかつて僧侶だった」
これは確かなことだ。皇帝自身も認めている。そしてだ。
仏教の教えは光と連想される。それが問題だというのだ。
「朕のそのことを謗っているものである」
「だからですか」
「この者は死罪」
「左様ですか」

「すぐに処刑せよ」
こうしてだった。この学者もだった。
処刑されることになった。彼はすぐに捕まえられ死刑が行われる市場に出された。歴代王朝の伝統としてだ。処刑は市場で行われるのだ。
そこに引き立てられながら。学者は項垂れた顔で呟いた。
「何故だ」
「何故か？」
「何故かというのか」
兵達がだ。死を前にして項垂れる彼に対して問うた。
「殺されることについてか」
「何故かというんだな」
「何故私が殺されるのだ」
ひいてはだ。文を書いた者達がだ。何故それだけでだというのだ。
「私も他の者も帝を貶めてはいない」
「どうせ貴方は死ぬ」
「だから言おうか」
兵達は小声でだ。学者に囁いた。周りにいる群衆に聞こえない様にして。

第三章

「全ては帝の気まぐれだ」
「そのせいだ」
それによるものだというのだ。
「帝のその気に障ることを書いたからだ」
「文にな」
「光が僧を指し示すというが」
「どうとでも取れるのだ」
「そんなものは」
まさにだ。そうしたものだった。
皇帝がどう思うか。全てはそれだけだった。
だがそれにより学者は処刑される。そのことをだ。
彼等はだ。こっそりと囁くのだった。
「貴方には同情はするがな」
「理不尽な話なのは確かだがな」
「こんなこともあるのか」
学者の言葉はこれ以上はないまでに苦いものになった。その言葉でだ。
彼はだ。首を横に振り言った。
「こんなことでは文字なぞ覚えなければよかった」
「そうかも知れないな」
「それは時として災いになるのなら」
「だが。仕方がない」
学者はやがてだ。達観に至った。
それでだ。こうも言ったのだった。
「これも天命だ」
「死ぬことも天命か」
「そうなのか」

「学者は文字で生きる」
学者はそれによって学者になる。
文字を操らなければ学者ではない。その文字でだ。
死ぬのならだ。ならばだと言ってだ。
処刑場に向かいだ。それを受け入れるというのだ。
そうしてだった。彼は。
項垂れた顔をあげてだ。背筋を伸ばし。
「では行こう。文字で死ぬことも受け入れよう」
「文字で生きているからか」
「受け入れられるか」
「そうするとしよう。だが」
それでもだというのだ。やはり無念さはあった。
そのうえでだ。彼は言った。
「帝のこの所業は必ず残る」
「それを残すのは」
「何なのか」
「文字だ。帝が否定される文字によって残される」
そうなるというのだ。咎として彼を殺すその文字でだというのだ。
「そのことは変わらない」
「そうなるか」
「帝のことは文字で残るか」
「全ては」
「そうなる。文字によってだ」
最後にこう言いだ。学者は群衆達が見守る中処刑の場に向かいだ。
静かにそれを受けたのだった。
明の太祖のことは歴史書に詳しい。彼の粛清、そしてこの文字の獄のことは書かれている。処刑された学者の言った様にだ。彼が忌まわしいと感じそれを処刑の口実にした文字によってだ。残されているのである。

禁じられた文字　完

2011・9・2

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0285z/

禁じられた文字

2011年12月1日01時47分発行